

地には、幾分農村的景観も混じるが、新興の住宅地であるために、新規転入者つまり東京方面に職場を持ち、夜間だけ市民となる多くの人々を収容している。

所沢市は、近世までに地方の小中心都市として栄えた旧町の基盤を核に、戦後の東京への人口集中の反作用としての転入人口の増加により、次第に住宅都市的性格を強めてきた都市である。その都市化は各地区で複雑な展開を見せ、全体的に都市的職業従事者の増加や、各地区の市街地の増大をみながら、次第に土地に密着した農業と対峙して内容を変化せしめ、今日の態様を形成してきている。首都圏の都市化の一典型とも言える所沢の変容の今後に興味が持たれる現在である

甌 島

一過疎に伴う地域構造の変化一

田 中 千 津 子

甌島は鹿児島県の西方45kmの地点にある離島である。古くから農業と漁業を行ってきた。しかし戦後急激に人口が減少してきた。昭和25年には24,744人であった人口が昭和45年には11,750人と半分以下になってしまっている。その結果、深刻な過疎現象をみるようになった。

甌島は全島が山がちであるために耕地に乏しく、ほとんどが階段耕作である。また台風の常襲地帯でもあり、強い西風を受けるので栽培する作物が限定されている。畑作のほとんどは甘藷である。そしてわずかな沖積地に米をつくっている。島においては長い間、甘藷が主食であった。しかし戦後は米を主食とするようになった。このことは食糧の自給ができなくなったことを示しており、かといって適当な商品作物も見当たらない。その結果、ほとんどの段々畑は耕作を放棄されてしまっている。今、島においてもっとも注目されているのは、肉牛の肥育を主とする畜産である。またピンク色でかのこ状の斑点をもつ「かのこゆり」は明治時代からその球根を輸出しており、現金収入を得る手段であった。しかし現在のかのこゆりの生産はあまり伸びていない。島の農業を柱むものはなんといいてもその零細性である。また農業従事者は高齢化しており、兼業農家率が高い。

甌島の漁業は、戦前まではいわしやかつおなど暖帯性の回遊漁に恵まれており、盛んであった。しかし戦後は大資本に押されて、ふるわなくなってしまった。甌島の動力船はほとんどが3トン未満である。

甌島は、現金収入を得る手段としての工業の存在が皆無といってよい。最近新しく発展しつつあるのが観光業である。観光客は、1、2年前からぼつぼつ来るようになった。この結果、連絡船の最初の寄港地である上甌島の里などには、民宿が数軒見られる。甌島の観光業はまだ未開発の段階といってよく、今後が注目される。

甌島の過疎は、上記のように各産業がふるわなくなって来ており、所得が相対的に見て低いことが主な原因である。と同時に島には都会風の諸施設がそろってないことも原因している。島には都会的な娯楽施設が全然ない。また高校もない。これは全国的に進学率の高くなった現代においては大きな負担である。

愛知県北設楽郡豊根村の地誌的研究

— 林業を中心として —

田 辺 保 世

論文は、愛知県東北部の1山村を対象とすることにより、現段階の山村の個別現実的姿を明らかにしようとしたものである。

近年における政治、経済、社会条件の大きな変化は、山村にも波及した。それらの一端は、たとえば過疎問題として社会問題化されているが、ことは単に、それにとどまらない。様々な問題を山村は抱えている。論文は、こうした山村の変化に軸をおいて考察することにより、その地域性を鮮明化しようとした。そこでは、当然、経済基盤の分析が主要な課題とならざるを得なかった。更に、林業は、調査地域における主要な生業であることから、これの分析を主におこなった。こうした分析を通じ、より一層、より深く、地域性を明らかにしようとした。

さて、対象地域は、自然環境に大きく規定され、地域の生産活動に、多大な制約を与えている。それは、農林業以外の生産活動に適さないことまた、農業における低生産性として現出している。こうした現状をみると、林業のみが、唯一、地域発展に向けての可能性を秘めていると思われる。しかしながら現実には、林業の生産は、むしろ後退している。単に、生産量だけではなく、造林活動においてもである。

調査地域は、全般的には、林業生産に有利な状況にある。自然的な面はもちろんのこと、社会的